り1992年12月までの6年間に収容した超低出生体重児は105例であり，そのうち82例が生存退院した（救命率78.1％）．当科フォローアップ外来にて発達予後が評価できたのは3歳時に74例，6歳時には62例であった（追跡率76.5％）．発達の評価は，自立歩行不能の脳性麻痺，精神発達遅滞（IQ<70），両眼失明を有する例を Major disability 群，歩行可能な脳性麻痺，境界 IQ（IQ<85），片眼失明，弱視を有する例を Mionr disability 群，上記以外を正常群とした．

6歳時の予後は正常群が68%，Minor 群が18%，Major 群が14%であった．3歳時の評価に比し Minor 群が3％，Major 群が6％増えていた．運動発達は3歳時の評価とほぼ同様であったが，知能発達は MR が14%，境界 IQ が13%と3歳時のそれに比し MR で5％，境界で4％増えていた．失明例はなく，弱視は2例のみであった．

12）Nasal DPAP（Infant Flow TM/NASAL CPAP SYSTEM）が有用であった Pierre－Robin 症候群の一例

松澤　幸恵・木下　　悟
鈴木　啓子・丸山　　茂（県立中央病院小児科）
須田　昌司

最近，最も古い人工呼吸器療法の一つである nasal CPAP の改良型の nasal DPAP が再注目されている．新生児領域では主に nasal DPAP は他の人工呼吸器からの離脱や無呼吸発作の治療，中等症の RDS の治療に用いられている．我々は，高口蓋と小顎症のため，多呼吸と陥没呼吸をきたし，挿管が困難だった Pierre－Robin 症候群に nasal DPAP を用い有用であった．上記適応以外に，本症例のような気道確保の困難な児に有用と考えられた．従来と異なる機構による nasal DPAP は，児に負担が少なく，利用価値の高い人工呼吸器と考えられる．

13）当科における常位胎盤早期剥離新生児の予後の検討

吉田　　宏・榊原　清一
小田切徹州・山崎　　肇（鶴岡市立荘内病院小児科）
伊藤　末志

常位胎盤早期剥離（以下早剥）で出生あるいは死産した新生児19例を対象とし，予後良好群12例と予後不良群7例に分類して，その予後を規定する因子について検討した．高齢，多産，妊娠中毒症，絨毛羊膜炎などは早剥の危険因子として知られているが，早剥の重症化因子とは言えなかった．剥離の程度の把握（Page 分類）は予後を予測する1つの因子と考えられたが，Grade Ⅰでも予後不良の症例があり，注意を要すると思われた．胎児心拍モニタリングでは，持続性高度徐脈を呈する症例が予後不良であった．症状発現時院内に入院していた症例はすべて予後良好であり，また発症より児娩出までの所要時間が200分以内の症例もすべて予後良好であった．以上より早剥は，発症より200分が臨界期と考えられ，Grade Ⅱや持続性高度徐脈を呈する症例は，速やかに児を娩出することが最重要と考えられた．

Ⅱ．特 別 講 演

「ヒト新生児における呼吸開始と制御システム」

名古屋市立大学医学部小児科
助教授　戸　苅　　創 先生

第221回新潟循環器談話会

日　時　　平成11年12月4日（土）
　　午後3時～6時
会　場　　新潟大学医学部　第5講義室

Ⅰ．一 般 演 題

1）腸骨動脈完全閉塞症例に対するステント留置術

目黒　　昌・中山　　卓（新潟こばり病院心臓血管外科）
山岸　敏治・丸山　行夫
江口　昭治（新潟心臓血管医学財団）

今回我々は閉塞性動脈硬化症による腸骨動脈の完全閉塞に対して経皮的にステント留置術を施行し，良好な再開通を得た2症例を経験したので報告する．

【症例1】70歳男性．庭木の手入れ中に急に左下肢の冷感・疼痛が出現したため近医を受診．急性下肢虚血の